

京都大学若手人材海外派遣事業 スーパージョン万プログラム
研究者派遣元支援プログラム

成果報告書

提出日：平成 26年 10月 17日

1. 採択者			
氏名	高井 正成	採択年度	平成 25 年度
部局	霊長類研究所	電話	
職名	教授	メール	
2. 渡航者			
氏名	西村 剛	採択年度	平成 25 年度
部局	霊長類研究所	電話	
職名	准教授	メール	
研究課題名	サル類における発声機構に関する実験的研究		
海外渡航期間	平成 25年 10月 1日～平成 26年 9月 30日		
3. 渡航に関する情報			
渡航先	国名：オーストリア 大学等研究機関名：ウィーン大学 研究室名等：認知生物学部 受入研究者名：W. Tecumseh Fitch 教授		

<p>渡航期間中の出張</p> <p>(渡航期間中に一時帰国や学会参加等の目的で短期の出張があった場合、その目的、行き先、期間を報告して下さい。)</p> <p>※複数回に渡る場合、適宜行を追加して下さい。</p>	<p>出張先：スイス（スイス連邦工科大学） 目的：ETH-Kyoto Symposium 参加 期間：H25. 11. 20～11. 23</p> <p>出張先：カナダ（Hyatt Regency Calgary Telus Convention Center） 目的：第 83 回アメリカ形質人類学会年会参加・発表・資料収集 期間：H26. 4. 8～4. 14</p> <p>出張先：オーストリア（ウィーン大学） 目的：10th Evolution of Language Conference 参加 期間：H26. 4. 14～4. 17</p> <p>出張先：ベトナム（Melia Hotel） 目的：第 25 回国際霊長類学会参加・発表・資料収集 期間：H26. 8. 10～8. 17</p>
<p style="text-align: center;">4. ジョン万プログラムによる成果</p> <p>以下の項目について、渡航期間中の成果、または今後見込まれる成果を具体的にお書き下さい。 ジョン万プログラム研究者派遣プログラムを通じて渡航された場合は、渡航者の提出する成果報告書の写しを添付することとし、この項目の記入は不要です。 それ以外の海外派遣事業等を通じて渡航した研究者にかかる派遣元支援の場合は、以下の項目を記入して下さい。</p>	
<p>国際共著論文の執筆</p> <p>(論文の題名、雑誌名、共著者名、刊行予定等)</p>	<p>A Chinese alligator in heliox: Investigating the potential for honest acoustic signals in crocodylians、未定、Reber SA, Nishimura T, Janisch J, Robertson M, Fitch WT. 投稿準備中</p>
<p>更なる外部資金獲得に繋がる国際共同研究の立上げ／実施</p> <p>(国際共同研究の内容、実施計画、応募予定の外部研究資金等)</p>	<p>本派遣を通じて、ヒトの言語の生物学的進化の重要な一側面である話しことばの解剖学・生理学的基盤の進化プロセスを明らかにするための、サル類を対象とした生物音響学的研究の国際共同研究体制を確立した。派遣者らが有するヘリウム音声実験技術と受入研究者らが有する声帯振動実験技術という両者の強みを活かし、それらを組み合わせることで、相互に補完することで、サル類の音声の発声機構の多様性とヒトとの共通性を明らかにすることができると。まず、2015年5月頃に、ウィーン大学の研究者を日本に招聘して実施するサル類の声帯振動モード分析実験を行う。また、同年8月頃には、実験資料を運んで、オーストリア側で声帯振動実験を実施する予定である。</p> <p>そのような交流・共同研究を基盤として、二国間交流事業(共同研究)への応募をはじめとして、日澳両サイドで、人的交流資金への応募を計画している。</p>

<p>国際研究ネットワーク の新規構築／深化</p> <p>(参加した学会や その他の学術・交流 組織、そこから構築／ 深化した研究ネットワ ークの内容等)</p>	<p>オーストリア・ウィーン大学認知生物学部は、ヒトの言語の生物学的進化に関する生物音響学的、生物言語学的研究の世界的拠点の一つである。10カ国以上の大学院生、ポスドクが所属し、そのうち数人とは、共同研究を実施、計画した。また、滞在中も、多くの国から世界トップクラスの研究者が訪問、共同研究を実施しており、交流を深めた。認知生物学部のスタッフとは、今後も、学生の交流も含めた、共同研究を進める予定で、ウィーン大学をハブとした研究ネットワークの一つとして、さらにネットワークを活用、進化していくことができる。滞在中、4つの国際会議に参加し、自身の研究成果を発表し、議論を深めるとともに、最新の研究動向をつかんだ。とくに、スイス・チューリッヒ大学人類学研究所とは、従前から共同研究を行っているが、さらに新規の共同研究を進めることで合意し、計画を進めている。</p>
<p>在外研究経験 による研鑽</p> <p>(渡航先機関で得た 研究の展開方法、研究 室の運営方法、教育方 針・人材育成方法等)</p>	<p>本派遣を通じて、研究室運営における人的資源の彼我の差を痛感した。派遣先では、教員2名に対して、4名ものサポートスタッフが配されている。事務マネージャー、ファンド・研究マネージャー、運営マネージャー、研究技術補助である。それぞれ、事務補佐、研究資金管理および大学院生の研究サポート、研究室運営にかかる諸手続き等の管理、研究推進にかかる技術的サポートを担っている。豊富なサポート要員により、教員2名でも15名程度の大学院生、10名程度のポスドクを率いて、効率よく、かつ強力に教育研究活動が推進できている。</p> <p>大学院生の研究は、主担当と、それをサポートするもう一人の大学院生をつけて推進されている。ある研究の主担当は、別の大学院生の研究のサポートをする。そのようにして、はば広い見識と研究技術、共同研究の運営を身につけるように配されている。</p>
<p>フィールド研究 の進展</p> <p>(渡航先国で実施した 実地調査や文献調査 等の内容)</p>	<p>なし。</p>